

C-77 追跡法による小・中学生時期の身体成長様相の観察(才1報)

福島大教育 ○高橋キヨ子 県立会津短大 甲野藤ウタ 松浦悠紀子  
聖和短大 雁部 愛

目的 被服構成学の立場から 個人追跡による身体成長様相の観察をする目的で、前報の予備調査に続き、福島県内の2校において、小学校1学年から年1回定期的に身体計測を実施して得た資料について本報では、小学生時期の成長についての概要を報告する。

資料と方法 資料は、会津若松市立鶴城小学校(略称A校)と、福島大学教育学部附属小学校(略称B校)に昭和45年度に入学した男女児童の計測結果である。A校では毎年6月下旬、B校では7月中旬に計測を実施し、昭和50年度の第6学年計測まで継続した児童のうち、更に、計測時に $X \pm 0.5$ 才の年齢区分によって年長群に属する者のみと対象とし、年少群は参考資料としたため、6学年では、A校は当初の計235名が男児48、女児61、計109名となり、B校は当初の155名から男児52、女児47、計99名となり、両校の合計で208名となった。対象の大部分は、若松市、福島市に生育し、両親の出身地も過半が福島県内である。研究項目は、身長・胸囲・体重・下肢長・上肢長の計測値5項目と、胸囲/身長・下肢長/身長・上肢長/身長・上肢長/下肢長の示数値4項目の計9項目とした。

結果 今回の小学生時期の観察では資料の処理に横断的方法を用いた。計測値5項目の成績で、A・B両校の男児間に差が見られたが女児には著差はない。示数値では男・女ともに著差はない。資料数も少いので便宜一括して概観する。性差については、9才までは男児、10才以後は女児が優れる。年間増加量の平均値が最大を示す時期は男児は11・12才間、女児は10・11才間である。成長の推移を個別に観察すると個人差の大きいことが見られるが、この点について、中学生時期に向って観察をさらに深めて行きたいと思っている。